

第二章 大和売薬の成立と展開

1 近世の医薬と大和の売薬

近世の医学 江戸時代を迎えて、日本の医学・薬学は大きな前進をみせた。中国の医薬が実質的に広く行われる学と薬学 ようになったのもこのころからのことである。医者（儒者を兼ねる者が多く、儒医と呼ばれた）や流派がふえ、医薬書の出版もさかになるとともに、薬物についての本格的な研究もすすめられるようになる。

江戸時代の初めには、曲直瀬道三の流れをくむ金元医学がさかんだったが、儒学における古学派の台頭にもなつて、漢・唐などの医書の古典、とくに『傷寒論』に依拠しようとする古方派がおこってきた。古方派は、名古屋玄医によって興され、後藤良山を経て一八世紀半ば香川修庵・山脇東洋・古益東洞らによって大成される。彼らはこれまでの権威を認めず、実証主義を重んじたが、一七五四年（宝暦四）東洋が京都で日本最初の人体解剖を行って『蔵志』を著わし、六腑説の誤りを指摘したのは、その明証といえよう。

また、薬学の面でも、元禄期の実学の台頭を契機に薬学研究が本格化した。貝原益軒が『大和本草』を著わして薬物の学問としての本草学の基を開き、つづいて稻生若水が『庶物類纂』を著わして本草学を大成した。幕府も薬草の栽培を奨励し、自らも薬園を経営したが、將軍吉宗は小石川薬園を整備拡張するとともに各地の薬草調査にあたりせたりした。しかし、近世の本草学は、薬物の名称（名物学）と真偽の鑑別（弁物学）を重視し、薬物の生産や製造

(製薬)についてはあまり研究の目を向けなかった。

他方、前章でふれたように、安土桃山時代にアルメイダらによって南蛮医学が伝えられたが、鎖国のために中絶、その後は長崎のオランダ通詞がわずかにこれを理解するにとどまった。一七七一年(明和八)、杉田玄白・前野良沢らがオランダの解剖書を翻訳して『解体新書』を出版、これを契機に蘭学がおこり、西洋医学が台頭した。一八二三年(文政六)、オランダ商館医師としてシーボルトが来日、長崎に鳴滝塾を開いて西洋医学を指導し、蘭方医もふえてきた。このため伝統的な漢方医との間に勢力争いがおこり、幕府はいちじ医官が蘭方を用いることを禁止したりした。しかし、一八四九年(嘉永二)以降、ジェンナーの牛痘接種法が実効をみせたこともあって、蘭方の優位が認められるようになった。一八五七年(安政四)幕府は、オランダの軍医ポンペを長崎に迎えて医学伝習所を開き正式な医学教育を始め、翌年蘭方医伊東玄朴を奥医師に採用、一八六一年(文久元)には西洋医学所を開設するなど、明治政府による西洋医学の採用を準備した。

売薬の 医学の興隆にともない、薬業も隆昌に向かうことになるが、その胎動はすでに室町時代末にみられる。京都あたりでは、寺社のほかに公家や医家、富裕な商工業者の中にも製薬にたずさわる者があらわれた。「洛中洛外図」にも薬種商が軒を並べているさまがえがかれている。奈良にもいろいろの合薬や薬屋があらわれていたことは、『多聞院日記』について前章でみたとおりである。

江戸時代のはじめには、医術同様に曲直瀬道三の調薬の方法が一世を風靡したといわれるが(池田端風「目」、マクリ・センブリ・ゲンノシヨウコなど、のちに薬の原料となる民間薬も用いられ、やがて現代の家庭薬のもとになる薬の製造・販売も始った。一六四五年(正保二)刊の『毛吹草』によれば、諸国の名物として、山城では洛中の龍腦丸・延

齡丹・蘇香園ほか十一種と善峯の目薬・山科の金屑丸、大和では西大寺の豊心丹、河内では産薬、和泉では返魂丹、摂津では道修谷の延命散、伊賀では目薬、伊勢では神仙丸、相模では透頂香（とうちんこう）、近江では昆元丹・天隈の膏薬、紀伊では待乳膏薬と目薬などの薬があげられている。このうち相模の透頂香のことは『鎌倉九代後記』にみえ、すでに北条氏綱（一四八六―一五四一）のころ小田原外郎（うらうら）として往来の人々にも迎えられ、わが国売薬のもっとも古い例とされるものである（『日本薬史』）。なお、洛中の名産にも外郎透頂香がみえる。

その後、大阪天下茶屋・近江梅木村の和中散のほか、京都の蘇命散・肝涼園・奇応丸・井上目洗薬・無二膏・速康散、富山の反魂丹、江戸の実母散、近江の万病感応丸などが知られるようになるが（『日本薬史』）、近江梅木村（現栗東町）の和中散については、一六九〇年（元禄三）長崎に渡来したオランダ東インド会社の医師ケンペルが、翌年の江戸参府の途次これに目をとめてその詳細を『江戸参府紀行』に記している。のちに来日したオランダ商館医師シーボルトも、一八五九年（安政六）再渡来した折の江戸参府のときこの和中散に興味をもち、神勢丸・苺草・万金丹・天真膏などの薬も購入したという（服部敏良『江戸時』）。（代の医学史研究）。

他方、大阪道修町、江戸の本町などが薬種の間屋町として繁昌するようになるが、都市を中心に薬屋（薬商）も現れてきたであろう。奈良町でも一六八七年（貞享四）のころ、一三軒の薬屋を数えることができる（『奈良』）。ただし、これらの薬屋が、製薬や薬種商を兼ねていたものかどうかは明らかでない。

しかし、売薬業が本格的に展開するのは享保期（一七一六―一七三六）以後のこと、富山の売薬業が大きく発展するのも一八世紀後半になってからのことである。『日本薬業史』も「享保前後ヨリ幕末ニ至ルマデハ売薬発育ノ時期ニシテ、此期ニ於テ生レタル売薬ハ維新以後ニ至ルマデ一般ニ賞用セラレタルモノ甚ダ多シ」として、京都・大阪・江戸のほか

山城・水戸・近江・美濃・金沢・熊本・紀伊・信濃・佐賀・阿波・下野・尾張・大和など、各地の有名薬四三種をあげている。大和の売薬としては、米田の三光丸と藤井の陀羅尼助の二つが取りあげられている。

こうした薬は、薬屋のほか、行商人や香具師の手で市や縁日でも売られ、富山や大和の売薬のように家庭に配置されるものもあった。

西洋医学の興隆にともなって、西洋の薬物も輸入されるようになり、化政期からは「蘭方ウルヌス」をはじめ蘭方を称する薬もあらわれるが（『日本薬史』）、その使用はごく一部にとどまった。

大和の『毛吹草』にも特記されていたように、大和では早くから西大寺の豊心丹の名が知られていた（後述）。一六九二年（元禄五）三月の東大寺大仏の開眼供養には、諸国から大勢の人が集り、奈良晒（麻織物）や団扇などとともに豊心丹がよく売れ、豊心丹は売切れてしまったという。一七一三年（正徳三）刊の『和漢三才図会』にも、大和国土産として豊心丹があげられている。

一七三五年（享保二〇）の「大和国細見絵図」には、豊心丹とともに今井（現橿原市）の保童丸があげられており、翌三六年の『大和志』には、大和の薬として豊心丹のほか、添下郡矢田村（現大和郡山市）の万病丸、葛下部大屋村（現新庄町）慶雲寺の桑山丸、宇智郡真土村（現五条市）の松脂膏（待乳膏薬）がみえる。また、一七六九年（明和六）の「大和国奈良并国中寺社名所旧跡記」に、「ならのめいぶつ」として、具足・晒・油煙墨などと並んで「西大寺ほうしんたん、三秀亭のしんたんぐわん」が記されている。三秀亭は現依水園にあった三秀亭をさすのであろうか。幕末一八四八年（嘉永元）の「大和国細見図」所載の「国中名産略記」には「豊心丹西大寺 香砂丸添下郡七条村 保童丸高市郡今井町 薬種 陀羅尼助」とある。

このほか、『日本薬業史』があげる葛上郡今住村（現御所市）米田家の三光丸や中嶋家の蘇命散が知られるようになり、長谷寺への参詣や伊勢まいりがさかんになるにつれ、街道筋の黒崎村（現桜井市）の元祖庄八郎のケゾク（解毒丸）も旅人に迎えられたという。

『大和売薬史』によれば、西国七番札所岡寺の門前の「くすりや旅宿」で瑠璃園を発売しており、高取藩主が参勤交代の際一行に持病丸を携行させ、他藩の家中にも分与して良薬の評判を得たとある。また、宇智郡上野村（現五条市）に桜井家の順榮湯・止痛丸のあったことが知られている。

また、吉野郡下市村（現下市町）の中嶋寿玄方の一七九五年（寛政七）「家伝名薬集」（資料編1-214、中嶋家文）（書一、以下資料編番号は省略）によれば、

和中散・懐気丹・木香丸・枇把葉湯・活寿丹・万能膏・奇応丸・五香湯・万金丹・淳石丸・銘神仙丹・蘇命丹・金紅丹・龍腦丹・安泰湯のほか、しゃくりの妙薬・痰コフトレル妙薬・口中ふくミ薬・チ多キ妙薬・子ニコリカタマリ妙薬・瘡薬・ワキガ薬・腹イタムニ大妙薬・インキンカフレ妙薬・アト産ヲリヌ大妙薬・魚類アテラレタル大妙薬・ヒゼンクスベ薬・セキノ大妙薬・フクヒヤク薬・はやくすり・口中アレ薬・頭痛カタツカヘ妙薬・風セキ・積ツカヘ薬・しゅのつむ満し薬・乳ノタル薬又出ル薬・万ノ目薬・たむしの妙薬・ひびしもやけの妙薬などの処方を書きと



安泰湯の看板

められている。ついでながら、口中歯磨（寒水石・白檀・丁字各等分、右等分粉ニシテ用ゆれハ妙也とある）や屠蘇・洗い粉や「匂ひ」の処方もある。これらの薬のすべてが、寿玄方でつくられていたわけでもないだろうが、看板薬である安泰湯（「さんぜんさんご冷血の道諸病によし」）をはじめ複数の

薬が製造・販売されていたことは確かであろう。今住の中嶋家でも、蘇命散（天狗そめい散）のほか一粒千金丹・藤本目薬、さらには人参延寿丹の製造が行われていたことが知られる。一七八一年（天明元）大和には、奈良で二三人、在方で九八人の薬種屋・合薬屋があったという。当時大和の各地では、名の知れた薬のほかさまざまな薬がつくられていたものとみられる。

大和の名薬として早くから世に知られ、広く世に迎えられたのは、陀羅尼助と豊心丹であった。

陀羅尼助

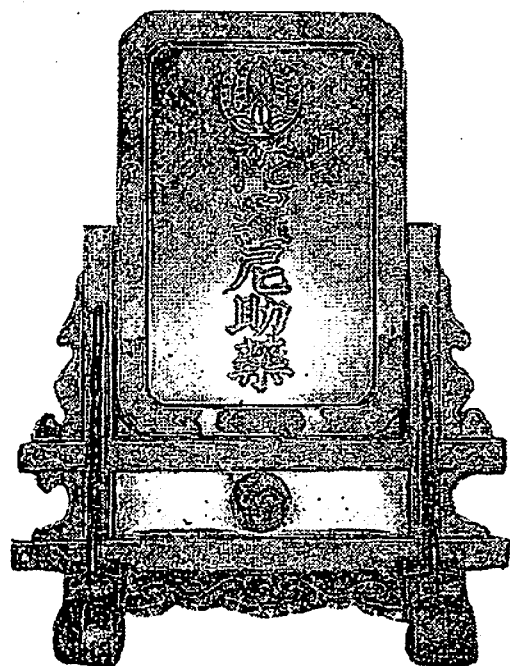
『紀伊続風土記』は高野山の産物として陀羅尼助をあげ、

此は大峰の陀羅尼助とて諸州に名高し、此山にても古く製せり、具名は陀羅尼助なり、古老伝に此薬を製時は、精進潔斎して口に秘密陀羅尼を誦持して手にて薬品を加持す、よりて陀羅尼の不思議力をもて他を助る故に中略して陀羅尼と習俗せしならん、大和当麻寺其外にも此陀羅尼あり

と記している（第五輯 高野山之部 風俗土産下）。高野山の陀羅尼助は弘法大師の創製と伝えるが、大峰のものは役行者（役小角）が創始したと伝える。安政年間（一八五四）の洞川村（現天川村）の明細帳に、

私方村方往古も弘メ来り候靈薬御座候、乍恐申伝へノ趣、神変大菩薩（役行者）御神伝ニ而私共先祖ノ後鬼江御授ケ被下候処、辱くも人皇四十五代聖武天皇天平十七年始メ而右御神伝ノ靈丹を陀羅尼数計と唱候御勅命を蒙り候由ニ而、今ニ御陀羅尼助と称へ連綿と諸国参詣人江弘通仕り来り候

とあり、紀州藩士畔田伴存の『和州吉野郡名山図志』（弘化四年）にも「此地ニ而陀羅尼助とて黄皮を濃く煎し、膏のことくなし竹皮にのへて諸方に出て売る（中略）此薬ハ往古役行者百草を取煎し薬となし世を渡るへしと後鬼之者洞川教ニ在へ置玉ひし薬方也ト云」とみえる。



陀羅尼看板（当麻寺中之坊）

陀羅尼助は、修験の山伏や高野聖などによって各地に伝えられるが（所によっては煉熊・百草などとも呼ばれる）、大和では洞川のほか当麻寺（中之坊）や吉野山でもつくられるようになった。当麻寺は役行者の修業の地と伝えられるところで、吉野山の陀羅尼助としては、『日本薬業史』が近世後期の代表的な売薬の一つにあげる藤井の陀羅尼助が著名であった。

はじめ陀羅尼助は、山伏たちの持薬・施薬として用いられたとみられるが、売薬として市場に出まわるようになるのは、他の売薬同様、商品経済の発展する近世中期以降のことであろう。やや時代を降るが、一七四七年（延享四）初演の「義経千本桜」に「幸い此村（下市）の寺の門前に、洞呂川の陀羅尼助を請売人がござりますれば、お供の前髪様（元服前の少年）つい一走り」とみえ（三段目椎の木の段）、一七五一年（宝暦元）の「役行者大峰桜」の第四に、陀羅尼助という男が薬の陀羅尼助を売り歩く次のような口上が載っている。

歌奇妙な名方（すぐれた薬の処方）。名方は陀羅尼助。此薬と申すは。唐土の天照皇太神。我朝のお釈迦様。若後家の腹の上にて三日三夜さのやりくりで。こしらえたてたる名方。岡ハヤメ先第一の調合には（中略）以上合してとろりだらりと煉合せたるは嘘の八百薬は六文（中略）家内がにくむ番頭の顔よりにかい薬の名方。頭痛目まい立くらみ上気たんせき。小児の虫氣五かんかたかい奇妙にフシなおると地だら助が我名をすぐに薬の名。竹の皮と箱わりがけ在々所々をフシ売り歩く

陀羅尼助の請売人(小売商)や薬箱を背負って陀羅尼助を売り歩く行商人の出ているのが注意されよう。ついでながら陀羅尼助について「大峰御夢想」の「根元ダラスケ薬」と記した広告があり、

しよくしよう はらのいたみ しゃく つかへ はらのはり たんせき づつう 小児ごかん むし ねつ はらのいたみ ちちをあまし夜なきに さゆにて御もちひ にがきをきらう御方の しゃく つかへ あるいは病なう していたむ所へ ゆにてとき付る やみ目 突目 かすみ ただれ いたむには水にてとき付てよし

と、その効能を並べたてているという(『日本古典文学大系99』補注二三)。

また、川柳などにも陀羅尼助を詠んだ句を散見する(鎌谷武平・伊直著『陀羅尼助』による)。

だら助は腹よりはまず顔にきき

花を見し土産に苦し陀羅尼輔

だらすけをのんで静は癩をさげ

だらすけを呑むようによむ無心状

近世後期になると、陀羅尼助は家庭薬として庶民の生活にとけこむようになっていたことがうかがえる。

江戸の文人大田南畝(一七四九—一八三三)が洞川を訪れたことがあったのか、その随筆集『一話一言』(巻十)に

ここに陀羅尼輔といへる薬あり、そお調じぬる所へいたりみるに、黄蘗のなまなましき皮を煉りつめたるもの

也、大峰に焚けむ香の煙のたまれるに百草を混じへ加持したるものなどいへるはよしもなきことなり

と書き残している。

いつの頃からか洞川の陀羅尼助屋が、鐘掛ヶ行場下に小屋を建てて出店をだすようになった。吉野山から洞川を經



陀羅尼助の広告

ないで山上詣りをする人たちを目当てに、陀羅尼助を売ろうとしたのであろう。陀羅尼助小屋がふえるにともない、宝曆（一七五二）の初め修験道当山派の三寶院の先達がこれを取払うよう命じたため、洞川村との間に紛議がおこった。洞川村から渡世に差支えるからと陳情をくりかえし、一七六六年（明和三）にいたって、鐘掛ヶ下に現在建っている小屋の上方には、今後一切小屋掛ヶはしないということとで落着をみた。一〇数年後の天明年間（一七八一）には二五軒の陀羅尼助小屋があったという（前掲「陀」）。

山上詣りの人たちは、たいてい講社をつくっており、毎年泊る宿も土産に陀羅尼助を買う店も決まっていた。宿屋と陀羅尼助屋は互いに結びついており、冬場に陀羅尼助をつくる宿屋も多かった。宿屋も陀羅尼助屋も固定した得意先をもっていたので、陀羅尼助屋の得意帳は、宿屋の客帳ともども一種の財産とみなされ、質入れされたり売買の対象にされたりした。一七九八年（寛政一〇）洞川村から、同じ天川郷の中越村や吉野山村・下市村での陀羅尼助の製造

販売を中止するよう願出たりしているが、当麻寺の中之坊との間では、本家争いがおこったこともあったらしい。真偽の程は定かでないが、双方相譲らず裁判沙汰になり、大岡越前守が当麻寺中之坊のは陀羅尼助、大峰のは陀羅尼助と呼ぶことにして決着をつけたという伝えがある。

豊心丹

陀羅尼助と並んで名薬の誉が高かったのは、西大寺の豊心丹であった。豊心丹は、一二四二年（仁

治三）四条天皇の命によって疫病退散の祈願を行った西大寺の叡尊

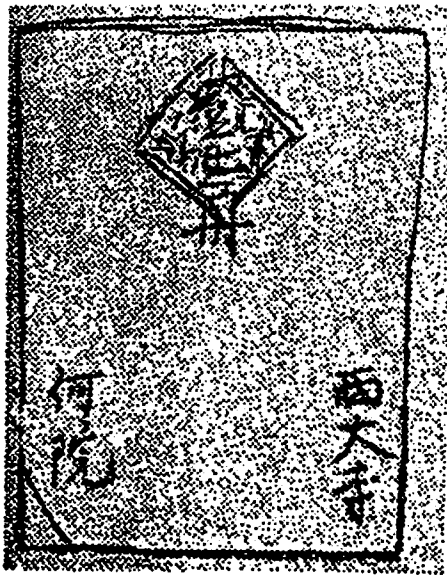
が、満願の夜に神明の感応があつて創製したものと伝えるが、異説も多い。一五七八年（天正六）の『金瘡秘伝』によると、

人参^ニ朱白檀^{一分}沈香^{一分}三朱畢^{一分}撥^{二分}樟腦^{三朱}縮砂^{一分}丁字^{三朱}木香^{三朱}川芎^{二朱}桔梗^{二朱}麝香^{二朱}無上茶^{二兩}
板榔子^{一分}三朱金箔^{五十枚}蜜香^{一分}三朱

を調査するとある。これらを原料にして寒晒粉で練つて丸薬にしたのである。豊心丹の名は『多聞院日記』の一五八九年（天正一七）十月晦日、同十八年三月四日の条などにみえ、贈答に用いられていたことがうかがえる。ついで『舜旧記』一六一二年（慶長一七）八月十六日の条に「於当寺豊心丹調合丸之事、爰許衆五、六人計雇也」、一六一九年（元和五）十一月廿日の条に「権少副奥州下向ニ付、紫帶一筋并蘇香円・鳳髓丹・丁子丹・西大寺薬五十粒遣也」とみえ、『本光国師日記』一六一四年（慶長六）六月十四日の条にも「二郎兵衛へ状遣ス、西大寺豊心丹二包遣ス」とある。

近世の早い時期から需要が高まったとみられるが、その効能として痢病・泄瀉・洪腹・風氣をはじめ暑気あたり、頭痛・二日酔・心気の疲れ・吐血・下血・小児の虫その他万病にきくとうたい、用法・用量として大人は一回一包、一日二回、白湯を用いて飲むと指示している。「南都西大寺豊心丹趣意」は、「其効速ニ其能著シキコト世人ノ善ク知ル所ニシテ世ニ無ニ比類ニ良薬也」と自賛しているが、近世中期の奈良の文人村井古道も「良薬なるの功能ハあまねく知る所なれはいふにやおよふ」（『南都名産文集』）とたたえている。

豊心丹は、『大和名所図会』に「坊中ことごとくあり」とあるように、寺中の各子院でつくられており、図のように院名も記して発売されたのである。西大寺では、正月七日から十四日まで製薬呪法を厳修し、禁裏と幕府へ献上していたという。一六九二年（元禄五）の大仏開眼供養の節、大仏参詣の帰途西大寺愛染堂に立寄つて豊心丹を買求める



豊心丹包紙〔南部名産文集〕より

人が多く、一日三〇貫文のもうけがあったが、やがて売切れてしまったという。その人気の程が察せられる。

豊心丹の評判が高まるにつれ、これをまねた似せ薬がつくられるようになったらしい。一七〇五年(宝永二)西大寺から奉行所へ、似せ薬が横行すると名声が落ちるから、きびしく取締まってほしいと願ひ出ている。これに対し奈良奉行妻木彦右衛門から興福寺・東大寺および町方に対し、所々で似せ薬を調査して「西大寺号并院号迄も似せ候而商売候段、兼々相聞江不届之仕形ニ候、向後少も似せ薬仕間敷候」と布達している(一市中)。しかし、一七三三年(享保一八)の「呉服名物類纂」に「西大寺かぎり申候、併只今ニ而者方々似せ多ク仕候而もうれ申候」とあるように、豊心丹を称する似せ薬の製造販売が絶えなかったようである。

一七七八年(安永七)豊心丹をめぐる、西大寺の竜池院・一ノ室と奈良の薬の老舗菊岡家との間に争論がおこっている。西大寺側は、菊岡家の豊心丹は似せ薬であるとしてその差留めを要求、これに対し菊岡家は、豊心丹の創製者とされる西大寺の叡尊はもともと当菊岡家の出で、これに由来する製薬は当然であると主張した。七月裁判があり、

菊岡家の豊心丹は古くからつくってきた伝来のもの故差留めはできない、ただし「西大寺豊心丹菊岡」の商標はこれを禁止し、以後は寺号を除き「伝来豊心丹菊岡」とすることで落着をみた(菊岡家文書五)。ここに菊岡家の豊心丹は、奉行所の公認を得ることになったわけである。菊岡家では他国への販売を心掛けていたようで、このあと京都をはじめ阿波・淡路への売弘めに関する史料が残されている(菊岡家文書六・七・八)。

なお、奈良の伝香寺でも豊心丹の製造販売を行っていたらしく、豊心

丹の由来や効能を記した版木が保存されている（資料編一五）。その由来によれば伝香寺の豊心丹は、後奈良帝の一五二九年（享禄二）管領畠山義忠の求めに応じ明から鄒舜功が来朝して豊心丹の薬方を伝承、これが義忠と親しかった筒井順昭に伝えられて筒井家の「家方」となり、「代々是を衆民に」施与してきたが、順慶が母の本願によって伝香寺を再興した際、この豊心丹の薬法が同寺に授けられ、「代々調合いたし衆人に得さしむる者也」とある。

2 薬種生産

植村政勝 大和とりわけ吉野・宇陀地方は、古くから薬草に恵まれた土地として知られていた。一七一三年の採薬行（正徳三）の『和漢三才図会』は、大和の土産を並べたあと「此外薬草多、出於金剛山一者良」と記しており、一七三六年（享保二）の『大和志』には、宇陀・高市・宇智・吉野など南大和の諸郡で地黄・当归・人参・大黄などを産出するとある。

売薬業の興隆にともなって、薬草の栽培もしだいにさかんになるが、大和では、幕府の採薬使植村左平次の採薬調査、その結果としての森野・下市両薬園の開設が大きな刺激になった。

実学を奨励した將軍吉宗は、薬草にも強い関心をもち、小石川薬園を拡張整備するとともに各地に採薬使を派遣して薬草の調査と採集にあたらせたが、採薬使の中でもっとも大きな足跡を残したのが植村左平次政勝であった。左平次は一七二〇年（享保五）から三四年間にわたって、八六回も各地を踏査したといわれる。大和へは、一七二六年と二七年にも足をふみ入っていたが、一七二九年（享保一四）「伊賀伊勢紀伊大和山城河内六ヶ国御用」として大和を中心